

民族和解とEU加盟は成るか

— デイトン合意11年目のボスニアを検証する —

河 野 健 一

A Long Way to Ethnic Reconciliation and Transformation to Civil Society

— Politics and Society of post-Dayton Bosnia and Herzegovina —

Kenichi KOHNO

Abstract: Almost eleven years after the Dayton Agreement and six years after the collapse of the Milosevic regime, Bosnia and Herzegovina seems to have regained peace and stability. No violent incidents have occurred since the cease-fire came to power. Political leaders are chosen through free, though not always fair, elections. The once ethnically divided armed forces, the size of which totaled approximately 500,000 troops during the heaviest stages of fighting, is now put under a unified single command, and the number of soldiers was cut down to about 12,000. The negotiation with the European Commission over the Stability and Association Agreement, a first step towards accession to the EU, is progressing well and is to be completed by the end of 2006.

However, the view from inside is quite different. I made a study tour to Bosnia and Herzegovina in September, 2006, and visited several cities and villages inhabited by three major ethnic groups consisting of Bosniaks a great majority of whom are Muslims, Serbs and Croats. Each group has a strong sense of distrust and even antagonism towards the other groups. Reflecting this rivalry the country is divided into two political entities: Republica Srpska (Republic of the Serbs) and the Federation of Bosnia and Herzegovina. The Serbs occupy nearly 90% of the population of Srpska, whereas in pre-war time there were many mixed communities. Within the Federation, there are continuous conflict of interests and power struggles between the majority Bosniaks and the minority Croats.

The two entities hold strong autonomous power ranging from police to education. The state government is extremely weak with strict limited jurisdiction. Thus, political parties and their leaders tend to put priority on ethnic interests rather than state interests or citizens' well-being. This complicated and ethnically divided political landscape is the product of the Dayton Agreement, whose main aim was to bring the brutal war to an end. This dual state structure devised eleven years ago does not fit the post-conflict era and can not meet the requirements for building a new state. The lack of a strong and effective

central executive body makes it hard to implement political and economic reforms necessary for the country's accession to the EU and NATO.

The four west Balkan states of Bosnia and Herzegovina, Serbia, Montenegro and Albania largely lag behind other former socialist states in democratisation, betterment of infrastructures and economic growth. Though the four countries are included in the ongoing process of the Euro-Atlantic integration, the pace of progress is frustratingly slow. They are also rife with corruption and organised crime. It is feared that this group of nations may build a black hole in Europe and become a new source of instability and conflicts.

Among these four states, Bosnia and Herzegovina has the most multi-ethnic characteristics. Should Bosnia and Herzegovina succeed in accomplishing internal ethnic reconciliation and in attaining impressive economic growth, it would encourage fellow countries to follow the example and thus help their accession to the EU and NATO. The early expansion of the EU and NATO to the whole Balkans would bring about sustainable stability and secure economic development of the region once called the 'powder keg' of Europe.

With this in mind the author would like to suggest the following points as the most important tasks to be tackled by the leaders of Bosnia and Herzegovina as well as by the international institutions involved in the reconstruction work:

- (1) In order to establish an effective central government, a new constitution should be adopted as the most urgent political agenda. However, the power transition from entities to central authority needs to be carried out step by step with utmost cautiousness so that it may not incur violent repercussions from the ultra nationalist groups still very influential in Srpska.
- (2) The Office of the High Representative, which is endowed with the prerogative of overseeing the implementation of the Dayton Agreement, should be abolished, as planned, in June 2007 to give the Bosnian government and people greater freedom in decision making. It will make them more accountable for their future and thus restrain the domination of nationalism in state and local politics.
- (3) 'De-nationalism' of education is indispensable for ethnic reconciliation. The jurisdiction over education policy should be transferred from local authorities to the central government for ten years at minimum. It will enable nation-wide adoption of common curricula free from nationalistic propaganda and prejudice.
- (4) Japan has invested a considerable amount of financial and technical resources to help reconstruction of Bosnia and Herzegovina. Japan's contribution is appreciated by local citizens as purely humanitarian assistance by a politically neutral country which was never involved in the struggles for regional hegemony. Japan should continue this effort because it is a test case to prove before the international community the effectiveness of its 'human security' conception adopted as a new guiding framework for its ODA policy.

はじめに

旧ユーゴ連邦の分解過程で発生したボスニア・ヘルツェゴビナ紛争は、20世紀末の欧州で生じた大きな悲劇である。かつて冬季五輪開催地ともなった小国は、3民族入り乱れての武力闘争によって無差別の殺戮と破壊の場と化した。おびただしい数の死者と難民を生んだ戦いは、北大西洋条約機構（NATO）の武力介入によって1995年11月に締結されたデイトン合意で終結し、翌12月、ボスニア・ヘルツェゴビナ（以下、ボスニアと略す）再生の法的基盤となる和平協定がパリで調印された。

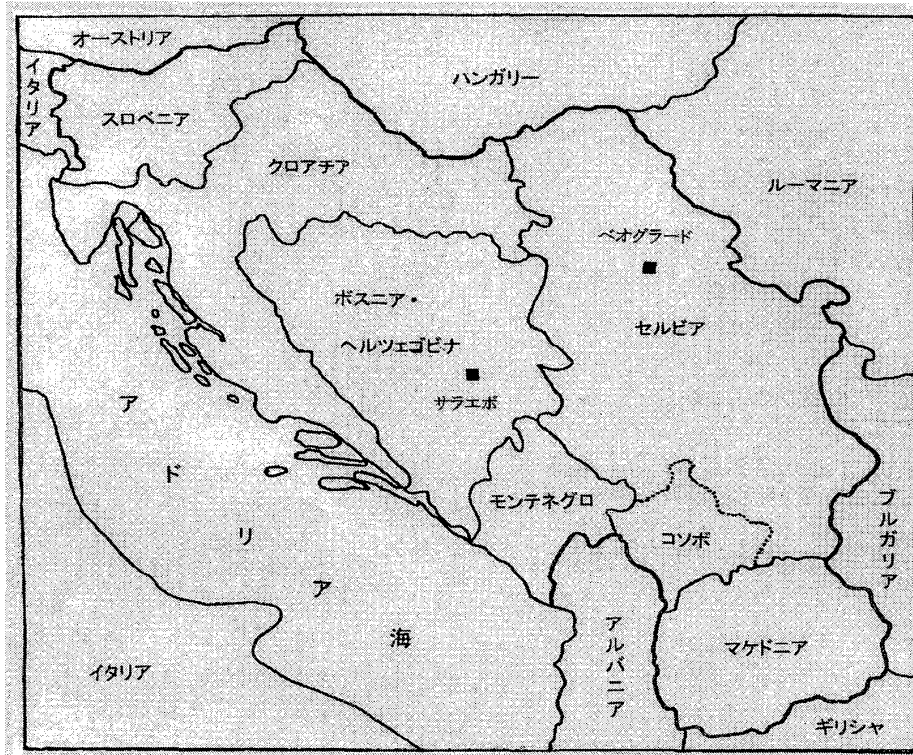
旧ユーゴを含むバルカン西部は民族対立と民主化の遅れで経済発展から取り残され、欧州統合の空白地帯を成してきた。熾烈な民族紛争が展開されたボスニアを平和な民主主義国家として再生させることは、欧州全域の安定と調和のとれた発展を掲げるEUの大戦略の不可欠の一部を成す。

デイトン合意から11年、民族和解と国家再建はどこまで実現したのか。3民族の共通目標であるEU加盟は果たして実現するのか。筆者はこの問いへの答を模索して2006年9月、ボスニア各地を回った。その調査結果をもとに、ボスニアの現状と直面する主要課題を検証し、今後の見通しの提示を試みるのが本稿の目的である。

1. 複雑な国家構造

旧ユーゴを構成した6共和国はいずれも独立主権国家となった。その中でも、ボスニアは極めて複雑かつ特異な国家構造となっている。ボスニアを論じる前提として、この国家構造に留意しなければならない。

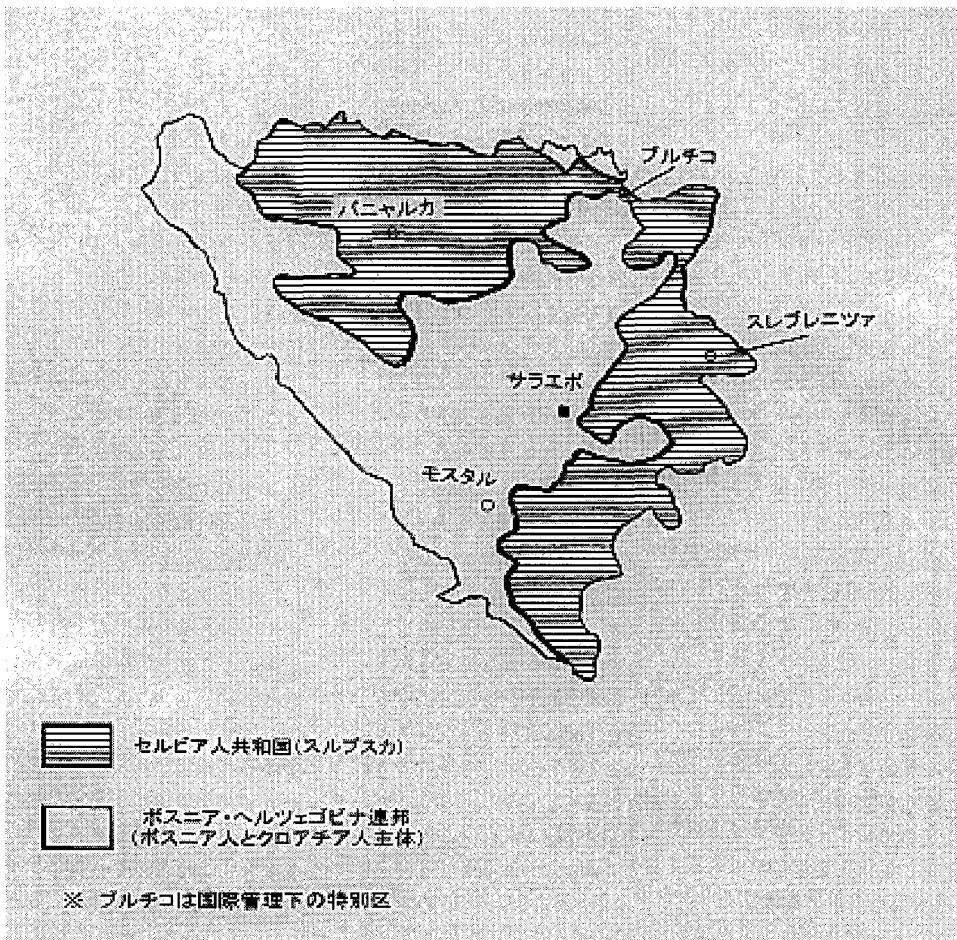
図1. ボスニアと周辺国



ボスニアは旧ユーゴスラビア連邦時代からボスニア人（イスラム教徒主体）、セルビア人（セルビア正教徒主体）、クロアチア人（カトリック教徒主体）が混在する多民族・多宗教国であった。この3民族が三巴の熾烈な武力闘争を展開したのが、3年半に及んだ内戦の実相である。 Dayton合意はボスニアを解体せずに、従前の国境内で主権国家として維持することを大前提に据えた。しかし、和平を早期に達成するためには、内戦終末時点での3民族の現実の力関係を尊重せざるを得なかった。

この結果、セルビア人勢力の支配地域を主体としたスルプスカ共和国（Republica Srpska. セルビア人共和国とも呼ぶ）と、ボスニア人勢力及びクロアチア人勢力の支配地域を合わせたボスニア・ヘルツェゴビナ連邦（Federation of Bosnia and Herzegovina. 以下、連邦と呼ぶ）という二つの構成体（entity）から成る国家枠組が憲法で定められた。停戦時の支配地域の比率を勘案して国土の49%がスルプスカ、51%が連邦に振り分けられた。さらに、ドナウ川に通じるサバ川に面した水運の要衝であり、図2に示すように北部と東部に半円弧状に連なるスルプスカの連結点に位置するブルチコは、いずれの構成体にも属さない特別区として国際管理下に置かれた。連邦とスルプスカはそれぞれの首相、議会を持つ。

図2. ボスニア・ヘルツェゴビナの家構造



両構成体の上に位置する国家 (state) 機関として幹部会 (presidium), 議会, 政府, 最高裁判所が設けられた。幹部会は3民族それぞれの代表である3人の幹部会員で構成され, その議長は3人が8か月交替の輪番で務める。議会は, 連邦とスルプスカの各議会から選出される上院 (15人) と直接選挙で選出される下院 (42人) から成る2院制である。両院とも議員定数の3分の2が連邦, 3分の1がスルプスカに割り当てられている⁽¹⁾。

国家機関の機能は外交, 防衛, 通商, 通貨管理などに限定され, その権限は弱い。政治の実権は二つの構成体にあるが, 住民の90%以上をセルビア人が占めるスルプスカとボスニア人及びクロアチア人の混成である連邦とでは統治構造にかなりの違いがある。スルプスカでは構成体の政府が強く, municipal と呼ばれる下位の自治体の権限はたいして強くない。これに比して, ボスニア人とクロアチア人の寄合い所帯である連邦の内情はより複雑である。連邦は合計10のカントン (canton. 他の欧州諸国の州や県に相当) で構成され, カントンは警察, 社会保障, 教育などの実権を握っている。その理由は, 3~4の州ではクロアチア系住民が多数を占め, ボスニア人優勢の連邦政府が強い権限を振るうことを嫌うからである。ボスニア人主体のカントンとクロアチア系が多いカントンの間には対立がある。従って, ボスニア国家の実態は, 3つの民族単位の統治機構の上に限られた権限しか有しない国家 (state) 機関が乗った連合体と見てよいだろう⁽²⁾。

国家と連邦の機関は首都サラエボに置かれているが, スルプスカの政府機関は西部の中心都市バニャルカにある。クロアチア人が多い連邦南部の中心都市はモスタルであるが, そのモスタル自体がボスニア人主体のカントんに属する地区とクロアチア人主体のカントんに属する地区とに分断されている。そして, クロアチア系住民の大半が「サラエボではなくモスタルが自分たちの首都」とみなしていることに, 民族間の亀裂の深さが浮き彫りにされている。

こうした複雑な構造を持つボスニアはまだ完全な主権国家ではない。和平協定の履行を監視・指導する機関として米国及び欧州主要国で構成する高等代表事務所 (OHR) がサラエボに設けられ, 国, 構成体, 自治体を統括する最高の権限を有している。戦争犯罪に荷担した経歴を理由にスルプスカ選出の幹部会員が OHR によって解任されたこともある。ボスニアは現在も OHR の後見下にあり, 歴代高等代表は英国, ドイツなど EU 主要国の高官経験者が務めている。国別では米国に次ぐ金額の支援実績を有する日本も OHR に職員を派遣し, 支援政策の立案・実施に参画している⁽³⁾。

和平協定締結後, 民族間の武力衝突の再発を防ぎ, 協定内容の履行を担保するため NATO を主体とする和平履行軍 (IFOR) がボスニア内に配備され, IFOR の後継として規模を縮小した安定化軍 (SFOR) が駐留した。しかし, 米軍がアフガニスタン, イラクでの作戦で余力をなくし, 04年からは約7,000人規模の EU 派遣部隊 (EUFOR) が平和維持機能を担っている。EU は約500人の文民警察も派遣し, 両構成体やカントンの警察機能強化に向けた指導と訓練に当たっている⁽⁴⁾。

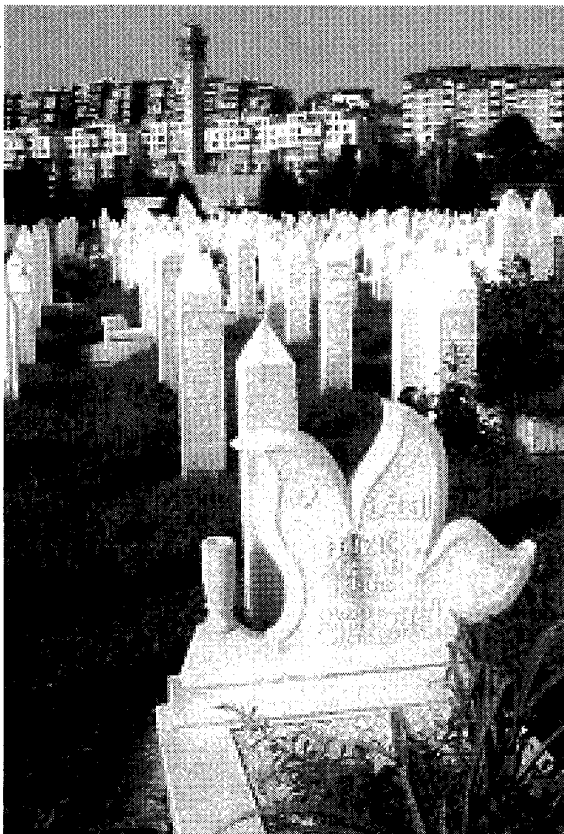
ボスニアには OHR, EU のほか国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) や国連開発計画 (UNDP), 全欧安保協力機構 (OSCE), 欧州評議会 (Council of Europe) など各種国際機関が職員を配置し, 難民の帰還と定着, 民族差別の撤廃と人権の擁護, 法の支配と民主主義の確立, 教育改革などを支援している。しかし, 支援の主役は EU である。OHR は来年6月で任務を終えて解散し, EU の特別機関 (ESA) が後見役に就くと見込まれている。

2. 重い負の遺産

今回の現地調査で改めて認識させられたのが、3年半に及んだ内戦による殺戮と破壊のすさまじさ、それが生んだ民族間の対立感情の根深さである。内戦に勝者はいない。3民族すべてが肉親と財産、安定した生活を失い、戦いの虚しさと平和の尊さを思い知らされたはずである。それにもかかわらず、互いに殺し合った憎悪と恨みは容易には消えない。 Dayton合意から11年を経てもその負の遺産は重くのしかかり、政治改革と経済再建の進展を阻んでいる。

2-(1) 残る破壊の爪痕と民族対立

内戦の傷跡はサラエボでもはっきり見て取れる。サラエボは古くからアドリア海とハンガリーやトランシルバニアなど内陸深奥部を結ぶ交易ルートの要衝として重きを成した。サラエボの地名はトルコ語のサライ（宿場、商人の休憩・接待所の意）にちなむとかで、オスマン・トルコ帝国はこの地に総督を置いた。薮戸（しとみど）の付いた伝統様式の木造住宅とオーストリア・ハンガリー帝国時代の壮麗なウイーン風建築物が建ち並ぶ旧市街には、イスラム教のモスクとカトリック、セルビア正教の教会が混在し、異種の文化が融合したバルカン屈指の美しい街といわれた。1984年の冬季五輪開催地としてスポーツ史にもその名を残した。



五輪メインスタジアム跡の集団墓地
(サラエボで)

だが、多民族共存のモデル都市といわれたサラエボは内戦発生直後からセルビア人勢力部隊の激しい攻撃の標的となった。首都を包囲したセルビア人勢力は高台の陣地から無差別の砲撃を続けた。旧ユーゴ建国の英雄チトー元帥の名を冠した大通りは、中高層ビルに陣取ったセルビア兵に狙い撃ちされ、「スナイパー（狙撃兵）通り」の異名が付いた。セルビア人勢力は封鎖されたサラエボへの人道的支援物資の搬入も妨害した。市中心部にあった青空市場へのロケット弾攻撃では多数の市民が犠牲となり、NATO が軍事介入に踏み切るきっかけとなった。

激しい戦いの跡は市内随所で目につく。市街戦の最前線となった地区の住宅の壁には、おびただしい数の銃砲撃の痕が残る。議会や人権難民省など国の政府機関があるビルの壁にも弾痕があった。筆者が泊まったのは客室数20余りの小さなホテルであったが、戦前は市内有数の規模と格式を誇る老舗だった。砲撃でホテル本体が破壊されたため管理棟を改造し営業を再開したという。元のホテルのビルは巨大な廃墟のまま残されていた。

内戦の悲劇を象徴するのが、冬季五輪のメインスタジアム跡に建ち並ぶ膨大な数の墓標である。セルビア人部隊の包囲下、昼夜を問わぬ無差別攻撃で死者が続出し、埋葬場所がなくなった。そのためスタジアムが集団墓地に転用された。五輪記念塔が残るスタジアム跡の墓地には祈りを捧

げにやってくる遺族の姿が絶えない⁽⁵⁾。

五輪開催時のサラエボの人口は約53万人で、3分の1がセルビア人だった。内戦時、セルビア系市民の多くがボスニア人と一緒に首都防衛の戦列に加わり、防衛軍の参謀長はセルビア人であったという。五輪スタジアム跡にもセルビア正教徒とカトリック教徒の墓所がある。しかし内戦後、サラエボの一部はスルプスカ所属地区として切り離され、市の一体性は失われた。ボスニア人とセルビア系市民の間には溝が生じ、スルプスカ所属地区に移住したセルビア系も少なくない。サラエボの人口は約40万人に減った。

内戦で破壊されたモスクはサウジアラビア、クウェート、ヨルダン、トルコ、インドネシアなどイスラム諸国からの支援で復興された。ホテルの部屋でも朝夕、モスクでの祈りの時を告げるアザーンが聞こえ、現在のサラエボは多民族国家の首都というよりボスニア人の街という色合いが濃い。

内戦では3民族のいずれもが住民の強制追放、略奪、非戦闘員の虐殺を行い、重大な犯罪行為についてはオランダ・ハーグの旧ユーゴ戦犯法廷（ICTY）で審理が続いている。戦犯法廷でひどく重い犯罪として糾弾されたのが、国連によって安全地帯に指定されたボスニア東部スレブレニツァで起こったボスニア人難民の大量虐殺である⁽⁶⁾。

事件は1995年7月に発生した。セルビア人勢力に追われた難民たちは、スレブレニツァ市郊外に設けられた国連防護軍（UNPROFOR）のオランダ軍駐屯地に逃げ込んだ。だが、セルビア人勢力の軍事指導者ムラジッチ司令官は国連の指定を無視してスレブレニツァ市内に軍を進め、オランダ軍の駐屯地を包囲した。わずか500人のオランダ軍部隊には侵入してきたセルビア軍と戦う権限も力もなかった。セルビア軍は難民を選別し、女性や幼児はトラックで別の安全地帯に移送したものの、老人や少年も含めて7,000～8,000人の男性を連れ去り、殺害した。和平協定締結後、犠牲者の集団埋葬地が次々に発見され、悲惨な事件の全貌が明らかになりつつある。戦犯法廷はセルビア人勢力の最高政治指導者であったカラジッチとともにムラジッチを大量虐殺の責任者として起訴したが、両被告ともいまだ逮捕されていない。

2003年、スレブレニツァ市内ポトチャリ地区にあったオランダ軍駐屯地跡の真向かいに、犠牲者の墓地を兼ねた慰霊公園が建造された。建設費は各国からの募金でまかない、完成式典にはNATO 介入の主導権をとったクリントン元米大統領が出席し、記念演説を行った。デイトン合意締結10年の節目となった05年7月、ポトチャリで世界各国代表や遺族など約5万人が参加して慰霊式が行われた。この式にはセルビア本国のタデイッチ大統領も出席し、ミロシェビッチ元大統領時代に犯された虐殺の犠牲者を悼んだ。

筆者が訪ねた時、ポトチャリの慰霊公園には建てて間もないと思われる新しい墓標が幾つもあった。集団埋葬地で見つかった遺体はDNA 鑑定に回され、身元が判明した遺体の一部は遺族の希望でこの墓地に再埋葬されている。新



自分たちで住宅再建に取り組む帰還難民
(スレブレニツァ郊外のスケラニで)

しい墓標は身元が判明して06年7月に再埋葬された約500人の犠牲者のものであった。公園中心部に建立された記念碑には身元が判明した犠牲者全員の名前が刻まれている。その数は06年9月までに約2,400に達したという。

スレブレニツァはかつて約3万人の人口を擁し、ボスニア人が多数を占めていた。和平協定で市はスルプスカ領となり、ボスニア系難民の多くが帰郷を拒んだ。地域経済の要の一つであったバッテリー製造工場が内戦で破壊、閉鎖されたこともあって、市の現在の人口は1万人を割り、空家が軒を連ねてゴーストタウンのようなさびれようだ。高失業で生活難に苦しむセルビア系市民は慰霊公園が建造されたことを快く思わず、園内に立ち入ろうとしない。虐殺事件そのものをでっちあげとして否定する人も少なくない。慰霊公園の建造や昨年式典におけるセルビア大統領の謝罪は、必ずしも民族間の対立の緩和につながってはいないようだ。

スレブレニツァで内戦の犠牲となったのはボスニア人だけではない。スケラニ地区は行政上は市の一部だが、未舗装の道路を車で走って1時間もかかる僻地である。山あい小さな集落が散在し、近くをセルビア本国との国境であるドリナ川が流れる。スケラニの住民の大多数は戦前からこの地で農業を営んできたセルビア人である。

市の出張所や商店などがあるスケラニの中心部で、大きな石碑とセルビア正教の教会を模したお堂の建設工事が進められていた。住民によると、内戦初期、集落は周囲の山に陣取ったボスニア人部隊に攻撃され、ドリナ川にかかる橋を渡ってセルビア領内に逃げようとする人々にも銃弾が浴びせられた。石碑とお堂の建設は、ボスニア人部隊に殺された同胞の霊を慰めるために生き残った住民が費用を出し合い、数年がかりで進めてきた。完成までにはまだ暫くかかるという。

ただし、スケラニには一部のボスニア系難民も帰還しており、両民族の和解に向けた事業が試みられている。

サラエボ以上に破壊の爪痕が生々しく残っているのがモスタルである。市中心部はボスニア軍とクロアチア軍が激戦を展開した最前線となり、ほとんどの建物が破壊された。かつてのショッピングセンターをはじめ数多くの建物が廃墟のまま無残な姿をさらしている。2、3階が壊れた建物の1階だけを修復し、営業している商店もみかけた。

市中央を流れるネレトバ川にかかるアーチ形の石橋はオスマン・トルコ時代の16世紀に建造され、市のシンボルとして多くの観光客を引き付けた。その橋も内戦で破壊された。石橋は04年7月、各国からの寄付をもとに再建され、翌05年、平和への願いを込めて世界遺産に登録された。



ビルの廃墟が並ぶモスタルの大通り

しかし、川を挟んでモスタルの東側はボスニア人居住区、西側はクロアチア人居住区に分断され、同じ連邦に属しながら両民族の間には深い溝がある。

筆者は1980年代の初め、まだ連邦体制を維持していたユーゴを取材で何度か訪ねたことがある。その当時、ユーゴは独自の「開かれた社会主義」でソ連圏と一線を画し、国民は西側に自由に出入りすることができ、生活水準も他の東欧諸国より高かった。セルビア共和国のコソボ自

治州で自治権拡大をめぐる中央政府とアルバニア系住民の間で対立が生じていたものの、連邦全体としては多民族共存を基盤とする国家の一体性が守られていた。約10年後にユーゴ連邦が崩壊し、大規模な民族紛争が発生するとは予想もしなかった。

多民族国家とはいえ、元を正せばセルビア人とクロアチア人は同じ南スラブ族である。カトリックとセルビア正教という宗教の違いはあっても、顔形も同じなら、言葉もほぼ同じである。ボスニア人は、オスマン・トルコ支配下の時代にイスラム教に改宗したセルビア人とクロアチア人の子孫であり、イスラム風の名前を持っている人がいるだけで、言葉や顔形はセルビア人やクロアチア人と区別がつかない。内戦前は隣人として暮らし、ボスニア人、クロアチア人、セルビア人の間の結婚もごく普通に行われていた。

その兄弟民族がミロシェビッチらの扇動によって三巴の戦いを繰り広げ、残虐な殺戮と凄まじい破壊に狂奔したのがボスニアの内戦である。その結果、3民族すべてがかけがえのない肉親や大切な財産、平和で安定した暮らしを失った。集団墓地に林立する墓標や僻地の集落まで焼き討ちした破壊の跡を見ると、人間の理性と良心をこれほどまでに狂わせてしまう民族主義の悪魔的な力を痛感せずにはいられない⁽⁷⁾。

2-(2) 教育改革にも民族対立の壁

OSCE がボスニア全土で民族和解に向けて展開しているのが、教育改革の支援である。その主導理念は「教育の脱民族主義」である。教育の場での民族差別をなくし、ロマなど少数民族も含めすべての人に教育を受ける権利を確保し、民族の違いを超えたボスニア市民としての意識を育てるのが改革の狙いである⁽⁸⁾。

しかし、民族主義の壁とカントンの強い抵抗に阻まれ、改革は難航している。OSCE モスタル事務所で教育部門の責任者を務めるマシュー・ニュートン (Matthew Newton) 氏によると、クロアチア人が多数を占めるカントンでは「一つ屋根の下に二つの学校がある」状態が続いている。教職員室と教室はクロアチア人用とボスニア人用に分離して設けられ、授業も民族ごとのカリキュラムに沿って別々に実施されている。スポーツ大会や文化祭など校内行事も別個に催され、民族を異にする教職員、学生間の交流はほとんどない。

クロアチア人が多数を占めるカントンでは、とりわけ民族主義色の強い教育が行われている。たとえば政治に関する講義・授業では、クロアチア本国の政府や議会の構成、選挙制度を教え、ボスニアについては全く触れない。だから、大学生の中にもボスニア国家について基礎的知識を持たない者が少なくない。歴史教育も同様である。ボスニア人のクラスで用いられる教科書はオスマン・トルコ時代にかかなりの紙数を割き、肯定的な面にも言及している。ところが、クロアチア人学生向けの教科書は、オスマン・トルコ時代には数行程度触れるだけで、オーストリア帝国統治時代を肯定的に評価する内容になっている。つまり、クロアチア本国で用いられているカリキュラム、教材をそのまま用い、ボスニア国民、連邦の市民としての教育は意図的に行わない方針が採られているのだ。

民族別に分かれた学校の統合や統一カリキュラムの採用を働きかける OSCE の努力に対して、新聞をはじめとしてクロアチア系メディアは概して否定的な反応しか示さない。「キリスト教教育の禁止を狙ったもの」とか、「クロアチア語による教育への弾圧」といった民族主義剥き出しの見出しを付けた記事で批判を浴びせ、戦争で壊れた教室の復旧や教育用機器・教材の不備などの切実な問題が取り上げられることはほとんどないという。

ニュートン氏が最も憂慮しているのは、学校統合や統一カリキュラムの導入に対して、父母よりも学生・生徒の方が強い反発を示すことだ。「父母の世代は多民族が平和に暮らしていた内戦

前の時代を知っている。ところが17～18歳以下の世代は民族分断の環境下で大きくなり、それを当然のものとして受け止めている。こうした意識を変えない限り、民族主義を超えた本当の市民社会は育たない。彼らがボスニアを支える中心的な世代になる前に、教育の脱民族主義を実現しなければならない。私たちは時間との競争に直面して焦りを感じている」と語った。しかし、ニュートン氏の危機感も、クロアチア系カントンの指導者にはなかなか理解してもらえないのが現実だ⁹⁾。

2-(3) 評価できる軍の一元化

以上に述べたように民族間の対立は根深く残っているものの、和解に向けた前進がないわけではない。和平協定発効後、時折り小さないさかいは起こっても、民族間の大規模な衝突は一度も発生していない。EUFORの駐留もあって、治安はほぼ正常化したといえる。連邦とスルブスカの間では人と物資が自由に行き交い、ユーロと固定レートで連結した同一通貨（コンバーティブル・マルカ、KMと略称）が流通している（ただし、紙幣はスルブスカではキリル文字表記、連邦ではローマ字表記の違いがある）。

デイトン後も民族別に編成されたまま残存していた軍が、中央政府内に新設された国防省の指揮下に一元化されたことは特筆に値する。内戦時、3民族合わせて約50万人に達した軍はサラエボ、バニャルカ、モスタルに駐屯する3つの連隊に集約され、総兵員数も約1万2,000人に縮小された。兵員数のさらなる削減も予定されている。軍の一元化と大幅縮小は、民族間の武力衝突の再発を不可能にする上で大きな成果といってよい。著名な政治ジャーナリストのゾラン・ピロリッチ（Zoran Pirolic）氏は「これまでに行われた最も前向きな改革」と評価する¹⁰⁾。

テンポは遅いものの、こうした和解に向けた動きが生まれているのは、「EU加盟が民族の別を超えた共通の目標になり、それが戦時の恨みと過激な民族主義組織による扇動を抑えるブレーキとなっている」（ピロリッチ氏）からである。だからこそ、EU加盟を促進するための経済改革の推進が内政の最重要課題といえるのであるが、これについては後述する。

3. 峠を超えた難民対策

内戦は多数の死傷者と難民を出した。死者数は約20万人と推定されたが、その後の調査によって行方不明者を含めて12～13万人に修正された。難民は国外に逃れた人（refugees）とボスニア内の他の場所に避難した人（displaced persons）に分けられる。中央政府の人権難民省が05年12月にまとめた調査結果によると、1992年から95年の間に国外・国内合わせて約220万人が難民となった。これは91年時点の国内人口の約半分に相当する。

国外に逃れた難民は約120万人で、その約40%がセルビア、モンテネグロ、クロアチアなど隣接国に出た。残り60%はドイツ（約34万人）、オーストリア（約8万4,000人）を筆頭に北欧諸国、米国などに救いを求めた。ただし、西欧諸国は内戦終結後、難民に帰国を求め、全体の半分以下にししか残留を認めなかった。

戦後処理の緊急課題は、国外・国内難民の帰還支援であった。だが、その受け入れは容易ではなかった。内戦で国内の住宅総数の半分近い約50万棟が損傷し、うち8割が全半壊だった。その修復は膨大な資金と労力を要した。内戦で強奪・没収された土地・家屋などの資産を原所有者に返還させる法的処理も必要であった。ボスニアにはこうした事業を実施する資金と人員がなく、UNHCRをはじめとする国際機関の支援や各国からの寄付によって仮設収容施設の建設や壊れた住宅の修理、食糧・衣料の支給、医療・教育施設の復旧などを行ってきた。

国外・国内からの帰還難民は97年に約25万人に達したのをピークに年ごとに減っていき、05年末までの合計数は101万人となっている。帰還者の数が難民総数の半分以上にとどまっているのは、国外在住の難民の間では若い世代を中心に荒廃した祖国に帰るのを嫌う風潮が強いこと、国内難民の中にも住む家がないなどの事情のために帰還を果たせない人がいるからだという¹¹⁾。

中央政府人権難民省のネルミナ・ジェパール (Nermina Džepar) 住宅・企画担当部長によると、05年末までに、国外に逃れた難民のうち約48万人が帰国した。約40万人は最初の受け入れ国にそのまま留まった。約22万人は最初の受け入れ国を出て、米国、オーストラリア、カナダなどに移住した。このほかに最終的な居住地がまだ定まっていない国外難民が約10万人おり、その多くは祖国への帰還を望んでいる。国内難民についても約18万人が避難先からの帰還を果たせず、住宅など受け入れ態勢の整備が引き続き必要という。土地・家屋など資産の原所有者への返還処理は、国際機関の支援を受けて05年末までにほぼ終了した。問題はまだ残っているものの、難民の帰還支援事業はほぼ峠を越えたといっただろう¹²⁾。

だが、内戦はボスニアの今後に影響する別の問題を生んだ。人口構造や地域の民族構成が大きく変わったことである。91年の国勢調査によると、国内人口は約430万人であった。また民族別構成はボスニア人43.7%、セルビア人31.4%、クロアチア人17.3%となっていた。その後、国勢調査が行われていないため正確な数字は不明だが、総人口は350~370万人に減少し、民族別構成ではボスニア人の比率が48%に増えたと推定されている。

最も顕著な変化が生じたのは地域社会の民族構成である。91年までは、現在のスルプスカ領域にもボスニア人やクロアチア人の比率が50%を超える地域が散在していた。連邦内にもセルビア人が住民の60%を超える地域があり、多民族共存の理念が実現していた。だが、国外・国内難民の多くがデイトン合意によって他民族支配の構成体の領域となった元の居住地への帰還を嫌った。これが大きく影響し、スルプスカはほぼ全域にわたってセルビア人が90%以上を占める状態になり、逆に連邦内ではセルビア人は圧倒的な少数派になった。連邦内もボスニア人とクロアチア人がそれぞれ住民の65~70%以上を占める地域に二分され、両民族がほぼ同じ比率で混住している地域はごく限られている。これがスルプスカと連邦の間、連邦内のボスニア人とクロアチア人との対立感情を持続させ、国内の統合を妨げる主因となっている。

帰還難民の中には内戦で夫や息子を失った寡婦や母子家庭が多く、それらの所帯には生活支援手当が支給されている。だが、国際機関からは「援助が自立を遅らせている」との批判も出始めている。サラエボに本部を置く難民支援のNGO「MOZAIK」のゾラン・プリイッチ (Zoran Purjic) 代表によると、才能ある若者の間ではボスニアの将来を見限る傾向が強まっている。最近の世論調査では、高等学校と大学の新卒者の約70%が新しい生活の場を求めて国外に出ることを望んでいる。また、帰還難民の若者の大多数は生まれ故郷の農村部に戻ることを拒んで都会に留まるため、地方の高齢化と過疎化が加速する恐れが強いという¹³⁾。

4. 政治改革と憲法改正

ボスニアが抱える政治上の重要課題は、内戦時の民族対立をそのまま凍結・維持してきた国家構造と政治風土を改め、意識と制度の両面にわたって「脱民族主義」を進めることである。つまり「民族のための政治」から「国民・市民のための政治」への転換である。この改革に本気で取り組まない限り、民族間の真の和解も実現できなければ、EU加盟に必要な真の民主主義国家への自己刷新と市場経済の基盤整備の達成は難しい。

だが、ボスニアの現状を見れば、連邦、スルプスカのいずれでも民族主義政党が政治の主導権

を握り、多民族政党は端役に甘んじてきた。連邦でいえば、内戦時のボスニア人勢力の指導者・イゼトベゴビッチ議長（故人）の流れを組む民主行動党（SDA）が最強の座を維持し、歴代幹部会員も SDA 幹部が占めてきた。これに対抗するクロアチア人勢力の最強政党は同じく内戦時の指導者ツジマン大統領（故人）が創設したクロアチア民主同盟（HDZ）であり、クロアチア人代表の幹部会員は同党から出してきた。スルプスカでは、カラジッチが創設したセルビア民主党（SDS）が政権の座を独占してきた。この3主要政党のほかにも多くの政党があるが、程度の差はあれ民族主義を看板に掲げている。

デイトン合意後も、それぞれの民族の既得権を守ることが政党共通の優先課題として受け継がれてきた。とりわけセルビア人とクロアチア人は人口比率で優勢なボスニア人に国政の主導権を握られることを恐れ、中央政府の権限強化に反対し続けてきた。この結果、中央政府、両構成体、連邦のカントンを合わせると首相の数は計13人にのぼり、大臣は180人を超え、議員の総数は約760人に達する。ボスニアの国民総生産（GDP）の約60%が政治家の給与、各種機関の維持費など行政経費に費消されているとの試算もあり、政治が非効率なことは他に類を見ない。

また、内戦時の政権政党が戦後も主導権を握り続けてきたことは、腐敗を蔓延させ、犯罪組織と政治家との癒着を生む土壌となった。スルプスカの政治家の中には戦争犯罪に荷担した者も少なくないといわれ、これが警察の指揮権を中央政府に一元化する改革を阻んできた主因といわれる。

OHR, EU, 欧州評議会などの国際機関は、連邦とスルプスカの指導部、議会、主要政党に憲法改正による統治構造の刷新を強く働きかけてきた。人権尊重と法の支配を基盤とする民主主義を確立し、国営企業の民営化など経済改革を加速させるには、中央政府の権限強化が不可欠であるとの判断からである。その結果、構成体やカントンの存続は認めるものの、それらの権限の一部を中央政府に移すことを主眼とした憲法改正案が主要6政党の間でまとまり、06年3月に議会に提出された。しかし、翌4月に行われた下院の表決結果は採択に必要な3分の2の賛成に2票届かず、憲法改正は挫折した¹⁴。

06年10月1日、3民族代表の幹部会員と国の下院議員の選挙、構成体の議会選挙が同時実施された。憲法改正は主要争点の一つであった。選挙の結果、従来の政治地図に変動が生じた。幹部会員選挙で連勝してきた3政党がいずれも他党に敗れたのだ。ボスニアでは SDA のティヒッチ（Tihic）党首が多民族政党を標榜するボスニア・ヘルツェゴビナ党（SBH）のシライジッチ（Sirajdzic）氏に、スルプスカでは SDS が独立社会民主党（SNSD）の幹部ラドマノビッチ（Radmanovic）氏に、クロアチアでは HDZ が多民族政党を看板に掲げる社会民主党（SDP）のコムシッチ（Komsic）氏にそれぞれ幹部会員の座を明け渡した。SNSD はスルプスカ議会選挙でも圧勝した。

この結果をどう見るか。国内外の評価はまだ定まっていない。3民族を代表する幹部会員のポストがそろって別の政党に移ったことは確かに大きな変化であり、既存の支配政党に対する国民の不満の表明と判断できよう。しかし、幹部会員のメンバー交替が国政に新風を吹き込み、民族利益優先から市民の利益優先への転換につながるの確かな見通しは立て難い。

なぜなら、勝利した3政党とも選挙運動では既存の支配政党以上に民族主義を強く押し出していたからだ。例えばシライジッチ氏は構成体の廃止を主張したが、その狙いは民族主義の克服よりも一枚岩の民族構成で独自の強さを持つスルプスカを潰すことにあった。SNSD は経済振興を重視する選挙綱領が有権者の支持につながったと見られているが、党首のドディック（Dodik）氏は民族主義者であり、スルプスカの廃止に応じるはずもない。構成体廃止を主張してきたシライジッチ氏がボスニア人代表となったことで、幹部会内部でスルプスカとの対立が激化する可能

性もある。他方、コムシッチ氏はボスニア系住民の票を集めて当選したと見られ、クロアチア系住民の強い反発を買っている。これも民族和解を進める上で波乱材料となりかねない。

ただし政治ジャーナリストのピロリッチ氏は、控え目な口調ながらも今後に期待を寄せる。「今回の選挙結果をもって民族主義が敗北し、寛容な多民族国家への扉が開かれたと断じることにはできない。しかし、SBH と SNSD の民族主義は内戦を煽った旧来の支配政党に比べれば穏健であり、柔軟性もある。新幹部会が EU と NATO への加盟の前提となる経済改革を最優先し、3 民族の共同努力を促すことを望みたい。新幹部会の最初の試金石は、憲法改正を実現できるかどうかであろう」⁹⁾。

5. EU加盟の見通し

EU と NATO への加盟を実現し、名実ともに欧州の一員としての地位を得ることが民族、党派を超えたボスニアの目標であることはすでに述べた。EU と NATO もボスニアの3 民族の和解と国家の再生を実現することが、欧州全域を「平和と民主主義の共同体」に統合していく戦略の不可欠の一部を成すことは十分に承知している。しかし、ボスニアが大西洋同盟、拡大 EU の正式メンバーになるためには、民族主義の克服をはじめ多くの壁を乗り越えなければならない。

5-(1) 前提条件としての戦犯の逮捕

EU 加盟の要件が多岐にわたることを考えれば、ハードルがより低い NATO 加盟が先行するのは確かであろう。その NATO 加盟への助走となるのが、「平和のためのパートナーシップ (Partnership for Peace. 略称 PfP)」のメンバー国になることである。

EU, NATO の双方とも、訴追された戦争犯罪者の身柄を戦犯法廷に引き渡すことを関係国に求め、これを加盟の大前提に据えている。セルビアがコシュトニツァ新政権発足から間もない01年4月、内戦の最高責任者であったミロシェビッチ元大統領を逮捕し、同年6月、身柄を戦犯法廷に引き渡したことは大きな転機となった。ミロシェビッチ被告は裁判途中の06年3月病死したが、多数の戦犯容疑者が法廷に引き渡され、審理が進められている。

ただし、数々の戦争犯罪で起訴されたカラジッチ、ムラジッチの両人はいまだに逮捕されていない。両名ともボスニアのセルビア人勢力やセルビア本国の民族主義組織に保護され、逮捕を免れてきたといわれる。今回のボスニア訪問中、両人の消息や身柄拘束の見通しを取材したが、確かなことは分からなかった。カラジッチは SFOR や EUFOR の捜索をかわし、家族とともにロシアに逃れたとの情報もあった。ムラジッチはセルビア本国に潜伏している模様だが、いずれ逮捕されて戦犯法廷に引き渡されるとの見方も耳にした。スレブレニツァ虐殺事件の直接の責任者として怨嗟の的となっている彼を逮捕すれば、国際的反響を呼び、セルビアとボスニアの NATO 加盟に道を開くことになるからだという。

だが、95年の起訴以来、国際手配の網をかいくぐって逃げおおせてきたムラジッチが易々と生贄になるとは思えない。楽観的見方は禁物であろう。

5-(2) 将来の国家像とEU加盟との連関

旧ユーゴを含むバルカンは多くの民族と宗教が混じり合い、相互の争いが絶えなかった。これに英国、オーストリア、ドイツ、ロシア、オスマン・トルコなど大国間の勢力圏争いが重なり、バルカンは「欧州の火薬庫」といわれてきた。サラエで発生したオーストリア皇太子夫妻暗殺事件が第一次世界大戦の発火点となったことは余りにも有名である。

現在もこの地域が多くの問題を抱えていることは、ボスニアとコソボの紛争で如実に示された。とりわけ欧州の中で最も民主化と経済発展が遅れているバルカン西部は、「安定と繁栄の大共同体の建設」というEUのグランドデザインの実現を阻む要因になりかねない。しかも、バルカン西部が先進グループと後進グループに分かれ、両者の格差が広がっていることが問題をさらに複雑にしている。旧ユーゴを構成した6共和国の中で最も豊かであったスロベニアは04年にEU加盟を果たした。これに続いてクロアチアとマケドニアが加盟候補国となった。これら3国を先進グループとすれば、後進グループを形成しているのがボスニア、セルビア、モンテネグロの旧ユーゴ3か国とアルバニアである。

EUはこの4か国にCARDS (Community Assistance for Reconstruction, Development and Stabilisation の略) というプログラムを適用し、民主化や経済改革を支援してきた。CARDSの次のステップが、加盟候補国になるための準備作業を支援する「安定化・準加盟協定」(Stabilisation and Association Agreement. 略称SAA) とその後続支援システムのIPA (Instrument for Pre-Accession) である¹⁰⁾。

EUはデイトン合意が履行され、民族間の武力衝突が再発せず、各種選挙も民主的に実施されてきたことを評価し、05年11月にボスニアとSAA締結交渉を開始した。ボスニア外務省のオスマン・トプカジッチ (Osman Topcagic) 欧州統合局長によると、「EUとのSAA交渉は順調に進んでおり、06年末までに終結する予定」という。また、EUの助言に沿って地域協力の強化に取り組み、セルビア、クロアチア、モンテネグロ、アルバニア、ブルガリア、ルーマニアなど9つの周辺諸国と自由貿易協定を締結した¹¹⁾。

こうした努力にも拘わらず、ボスニアがクロアチアやマケドニアに比べても経済発展で遅れをとっていることは否めない。弱点の一つがインフラ整備の立ち遅れである。鉄道は内戦で大きな損傷を受け、英国などから中古車両を導入して復興に取り組んでいるものの、輸送効率はまだまだ低い。アドリア海に面する海岸線がわずか20kmしかない内陸国であることもハンディとなっている。クロアチアのプロチェ港を共用させてもらうことで話がついたものの、同港と内陸部を結ぶ高速道路がない。EUは全欧規模で輸送・通信・エネルギーの幹線ネットワークを整備する大プロジェクト (TEN) を進めているが、ボスニアはその対象に含まれていない。

国営企業の民営化が遅れていることも、外資導入にブレーキをかけ、経済発展を妨げている。鉄鋼、アルミニウム部門は民営化されたが、石油、石炭などエネルギー部門は国営のまま。急成長しているテレコム部門は民族別に三つの企業が並び立っている。このうちバニャルカに本社を置くセルビア系のテレコム企業のみ民営化が決まった。その経営権獲得めぐってドイツ、オーストリア、フィンランドなどのテレコム大手が激しい競争を展開している。しかし、セルビアとモスタルにそれぞれ本社を置くボスニア系とクロアチア系のテレコム企業については民営化のめどすらついていない。その理由は、この収益率の高い2社の経営幹部にそれぞれの民族政党の大物が名を連ね、民営化すれば巨大な利権を失う結果になるからだという。政治が民族主義の虜になっていることが経済発展を妨げていることの証左といえる。

話をEU加盟の見通しに戻せば、ボスニアは改革努力の証として競争政策、食品や工業製品の安全基準、標準化、知的財産権の保護など、この3年間に40を超える法律を採択した。だが、アキと略称されるEUの法令体系は4万ページにのぼる。そのすべてを国内法化し、実施のための諸制度を整備し、EUの既加盟国と同じ条件での競争に耐える国内産業を育成していくには、官民力を合わせての努力を要する。トプカジッチ局長も認めるように、こうした複雑多岐な作業を効率よく実施していくには、強力な権限と能力を備えた中央政府の存在が不可欠である。現在の民族別に分割された国家構造・行政システムのままでは、EU加盟に必要な基盤整備や制度改革

が大幅に遅れることは避けられない。「あくまで個人的な見解」と断ったうえで、同局長は「NATO加盟が先行し、EU加盟は十数年後になるのではないか」との見通しを漏らした⁴⁸。

国民の所得水準を引き上げて国内市場を豊かにしていくのも、EU加盟に向けた重要な準備作業である。公式統計によると、ボスニアの平均失業率は40%を超え、国民の3分の1が貧困層に属するといわれる。ただし、公式統計は割引して受け止める必要がある。税金逃れの副業や社会保障負担を免れるためのヤミ雇用が広く行われており、実際の失業率は18~20%程度と推測されている。また、国外居住者からの送金が国民総生産（GDP）の約20%に達するとの試算もあり、実際の所得水準は公式統計をかなり上回っているようだ。サラエボ市内だけで約18万台の自家用車が走り、携帯電話も広く普及していることからみて、一人当たり年間所得はすでに3,000ドルの大台に達しているとの見方が有力である。

しかし、公式統計と国民の生活実態の間にはかなりの違いがあることを考慮に入れても、国が民族対立によって分断されていることがボスニアの潜在力を殺ぎ、経済発展を遅らせていることは否めない。問題は、この政治風土をどう変えていくかである。ピロリッチ氏の見通しはやや悲観的である。「残念ながら、民族の利益よりも国民全体の利益を優先する市民社会的な政治文化を育てるにはまだ長い時間がかかる。ボスニア人による支配を恐れるセルビア人はスルプスカの廃止には絶対に応じないだろう。EUに加盟し、大きな傘のもとで民族別構成体の境界を無意味にしていくしか解決の道はないと思う」⁴⁹。

前述のOSCEの英国人職員ニュートン氏は別の見方を示す。「英国は北アイルランドの民族・宗教対立を抱えながらEU加盟を果たした。ベルギーもオランダ系フラマンとフランス系ワロンの対立に悩んで国家構造を再編した。ボスニアの現状はベルギーに近い。国がスルプスカと連邦に割れたままでもEU加盟は実現可能だと思う」と語った⁵⁰。

EU加盟を促進するためには中央政府の強化が先か。EU加盟で狭隘な民族主義の所産である構成体の意味を薄めるしか道はないのか。ニワトリと卵の関係に似ているが、民族の違いを超えた共通利益の存在をしっかりと国民に認識してもらうことが重要課題であるのは確かであろう。ニュートン氏が指摘するように、民族を超えた市民意識を育くむ上で教育が果たす役割は極めて大きい。選挙後の新指導部が国家機能強化のための憲法改正や脱民族主義の教育改革、国民本位の経済運営に本気で取り組むかどうか。それによってボスニアの今後が大きく左右されるのは間違いない。

6. 日本への期待

日本はボスニアの戦後復興に様々な支援を行ってきた。その貢献が民族の別を超えて高く評価されていることは、今回の取材で実感できた。

内戦で公共交通機関が破壊され、住民は移動手段を失った。その困窮を和らげるため、日本政府は96年から01年にかけてサラエボ、バニャルカ、モスタルの3市に大型、中型、身障者用を合わせ112台（約28億5,000万円）のバスを贈った。日本国民からの寄贈であることを示す日の丸のマークを付けたバスは、3市の交通局職員によって入念に整備され、市民の主要な足として活躍している。

モスタルのホテル従業員は匿名を条件に、こう語った。「壊れた石橋修理のためにまずトルコが資金を寄付してくれた。そのカネは消えてしまった。次にイタリアが寄付したが、それも消えた。政治家や市幹部が着服したといわれている。橋は3度目の寄付でようやく修復されたが、現金ではなく住民生活に直結する現物を支給した日本のやり方は賢い。市民に最も感謝されてい

る」。

モスタル中心部のクロアチア人地区にあるモスタル高等学校（ギムナジウム）はオーストリア帝国時代に創設された名門校である。内戦時の砲撃で校舎の一部はまだ壊れたままで、壁には弾痕が生々しい。この学校にはボスニア人の学生も通っており、OSCE は民族融和をはかる教育改革の実験校に指定している。校長は一人しか置かず、職員室も統一されたが、授業はクロアチア人とボスニア人に分かれ、別々のカリキュラムを用いて実施されている。

昨年从这个学校で、日本から贈られた25台のパソコンを使って IT の授業が行われている。同校では以前から IT の授業が設けられているものの、他の科目と同様、民族別に分かれて実施されている。この分裂状態を少しでも改善するために、日本政府はパソコン贈与に際して「両民族の学生が同じ教室で一緒に学ぶこと」という条件を付した。

合同の IT コースは、既存の民族別授業とは別枠の希望者のみを対象とした課外授業として始められた。だが、新しいパソコンとカリキュラムを用いた授業は学生たちに好感を持って受け入れられ、学内で評判となった。さらに、同じ科目を同じ教室で学ぶことがきっかけとなってバスケットボールを一緒に楽しむなど、民族の違いを超えた学生間の交流が深まる副次効果を生んだ。

合同授業は教員や学生の父母にも高く評価され、06年秋の新学期から正規の授業に格上げされた。この決定を後押しするために、日本の国際協力機構（JICA）は同校に専門家を派遣して正規科目としてのカリキュラムづくりや授業のやり方の改善に手を貸した。前述した OSCE のニュートン氏も、「民族の違いを超えて学ぶのに最も適した科目」と合同 IT 授業の今後に期待をかけている。

JICA が戦後復興の支援として力を入れているいま一つのプロジェクトが、スレブレニツァの僻地スケラニ地区で帰還難民を主な対象に展開している農業指導である。地元の風土に適し、しかも一定の収入が得られるような農業生産を資材と技術の両面から支援し、自活の道を切り開いていくのが目的である。また、ボスニア系帰還難民とセルビア系の難民・地元住民との融和を進めることも事業の狙いの一つだ。

この難しい任務をこなしているのが大泉泰雅さん（56歳）である。農業大学を卒業後、青年海外協力隊を振り出しに農業専門員として JICA 一筋に生きてきた。これまでネパール、フィリピン、インドネシアなどで数々の難しい仕事をこなした実績を買われ、ボスニア復興支援という新しい仕事を担うことになった。

大泉さんはスケラニの民家に間借りし、帰還難民や村人と生活をともにしながら指導に取り組んでいる。プロジェクトは06年3月から08年3月までの2年間を予定しているが、仕事は実際には05年夏の予備調査から始まった。支援対象はセルビア系、ボスニア系合わせて467家族（06年11月現在）で、四輪駆動車でしか入れない奥地の集落まで含め6地区にまたがる。今後、帰還難民が増えれば、受益者はさらに増える可能性がある。

事業の内容は、帰還難民や協力を申し出た地元の住民グループの希望・意見を取り入れて決めた。現在、実施しているのはプラムとリンゴの苗木の植え付け、ハーブとイチゴの栽培、牧畜用干草の生産、養蜂、キノコの栽培と乾燥などである。いずれも現地の土質や気候に適し、伝統の技術が活用でき、商品化の展望が持てるものばかりという。プラムはプラム酒、リンゴはリンゴ酢に加工して商品価値を高めることにしているが、キノコや蜂蜜の品質は上々で、早くも専門業者から買付けの商談が舞い込んでいる。

国連機関や他国の支援団体は資金や資材を提供するだけで、責任者が現地に腰を据え、住民と直接向き合って技術指導することはしない。だから赴任当初は、「何か儲けをたくらむ下心があって村にやってきたのではないか」と大泉さんにあらぬ疑いの目を向ける住民が少なくなかった。

また、耕耘機やトラクターなど日本の援助資金で購入した機材の使用の割振りについても受益者の間で利害衝突が起こり、その調整に苦労した。

しかし、両民族に分け隔てなく接し、奥地にまで足を運んで指導に取り組む大泉さんの熱意と仕事ぶりを目の当たりにして、人々の信頼は深まった。評判を聞いて国連機関や他国の支援団体が視察に来るようになった。スレブレニツァ市も、巧みなリーダーシップで住民をまとめていく大泉さんの手腕を高く評価し、事業を支援する担当職員を任命した。

従前、JICA の技術協力は途上国の経済発展の支援に限られていたが、2003年に「人間の安全保障」が日本の政府開発援助（ODA）の新しい主導理念として導入されて以降、紛争地の戦後復興支援にも適用されるようになった。スケラニで始まった農業支援事業は、新路線の ODA がバルカン西部の平和定着に貢献できることを実証するパイロット・プロジェクトの意味を帯びている。

ボスニア内陸部の冬は長く、スケラニは半年近く雪に閉ざされる。家族を日本に残し異郷の僻地で帰還難民のために尽力する大泉さんの健康を祈って、本稿の結びとしたい。

[注]

- (1) 95年12月に調印、採択された和平協定とボスニア憲法については下記を参照。
The General Agreement for Peace in Bosnia and Herzegovina
The Constitution of Bosnia and Herzegovina
(<http://www.oscebih.org>)
- (2) ボスニアの行政機構については下記を参照。
Identity Card of BiH (<http://www.predsednistvobih.ba>)
- (3) OHR の設立経緯、権限、構成などについては <http://www.ohr.int>
- (4) EUFOR については <http://www.euforbih.org>
- (5) 内戦時のサラエボの惨状は、現地ジャーナリストの手になった下記のドキュメンタリー（ドイツ語版）に詳細に描かれている。作品には多くの写真が添えられている。
Miroslav Prstojevic, “Sarajevo-Die verwundete Stadt” (DAG Grafika, Ljubljana, 1994)
- (6) 旧ユーゴ戦犯法廷とスレブレニツァ虐殺事件の審理については下記が詳しい。
多谷千香子著『「民族浄化」を裁く』（岩波書店、2005年）
- (7) 旧ユーゴ内戦の発生には経済的要因も大きく作用した。これについては阿部望著『ユーゴ経済の危機と崩壊』（日本評論社、1993年）が詳しい。
- (8) OSCE による教育改革の現状は下記の報告書が最も詳しい。
“Raising Debate: is BiH Respecting its International Commitments in the Field of Education
Question for the Citizens of BiH”
(OSCE Mission to Bosnia and Herzegovina, 19 April 2005)
- (9) 06年9月、モスタルで行った筆者とのインタビュー。
- (10) 06年9月、サラエボで行った筆者とのインタビュー。
- (11) 難民に関する詳しい統計や現状分析については下記を参照。
Ministry of Human Rights and Refugees, Bosnia and Herzegovina, “Comparative Analysis
on Access to Rights of Refugees and Displaced Persons” (Sarajevo, December 2005)
- (12) 06年9月、サラエボの人権難民省で行った筆者とのインタビュー。
- (13) 06年9月、サラエボの MOZAIK 本部で行った筆者とのインタビュー。
- (14) 憲法改正の挫折については欧州評議会の議会が06年6月29日採択の決議で厳しく批判し

た。その内容については下記を参照。

“Constitutional Reform in Bosnia and Herzegovina-Resolution 1513”

憲法改正に対するボスニア内の反対論の一例としては下記論文がある。

Zlatko Hadzidedic, *“The Constitutional Debate in Bosnia and Herzegovina”* (Bosnian Institute Monthly Forum, 2 August 2006)

(15) 06年10月, 選挙結果について同氏が e-mail で筆者に寄せたコメント。

(16) EU の対ボスニア政策については下記を参照。

“Enlargement: Relations with Bosnia and Herzegovina” (<http://ec.europa.eu>) バルカン西部の統合の必要性については欧州の複数の識者, 研究機関の共同執筆になる次の論文が参考になる。

International Commission on the Balkans, *“The Balkans in Europe’s Future”* (Sofia, April 2005)

(17) 06年9月, サラエボの外務省で行った筆者とのインタビュー。

ボスニア政府の EU, NATO 政策については下記を参照。

Council of Ministers of Bosnia and Herzegovina, *“EU Integration Strategy of Bosnia and Herzegovina”* (Sarajevo, June 2006)

Presidium of Bosnia and Herzegovina, *“General Directions for Implementation of Foreign Policy of Bosnia and Herzegovina”* (Sarajevo, March 2003)

(18) 前記外務省でのインタビュー。

(19) 前記サラエボでのピロリッチ氏とのインタビュー。

(20) 前記モスタルでのニュートン氏とのインタビュー。